

# 大学と地域の連携による生涯学習の展開事例（音楽）

～地域コンサートの実践～

The development example of the lifelong learning by  
cooperation of an University and the area (music)

～ Practice of area concert ～

千 葉 圭 説      村 井 俊 博  
Keietsu          CHIBA      Toshihiro      MURAI

北翔大学生涯学習システム学部研究紀要  
第 12 号 (2012)

# 大学と地域の連携による生涯学習の展開事例（音楽）

～地域コンサートの実践～

The development example of the lifelong learning by  
cooperation of an University and the area (music)

～ Practice of area concert ～

千 葉 圭 説      村 井 俊 博  
Keisetsu      CHIBA      Toshihiro      MURAI

## はじめに

大学と地域の連携は、大学の今日的な課題として、各地のそれぞれの所でいろいろな研究や実践が展開されている。また、本学でも「生涯学習」の推進としてエクステンションセンターの公開講座や地域の教育委員会と他大学等との連携講座などが進められている。

しかし、これは連携という視点から見ると、まだ一部でしかなく、全体的にもっと日常的に、そして具体的に推進しなければ、なかなかこの課題対応や目標に到達できないのではないかと思われるのである。

そこで、連携できるものの日常化を目指し、さらにその強化や拡大を目指して、具体的な展開を図るために、「地域コンサート」を実施し、連携を探めるための実践的な方法として日常的にコンサートを行い、その実践後その課題や推進の問題を明らかにしようとするものである。

キーワード：地域コンサート，連携機能，演奏プログラム，

## I 研究の概要

今日の多様化し急速に変化する社会において、人々はその対応の為に、常に学び続けることが必要であることから、「生涯学習」を進めようと、その環境づくりとしての学習機会や場の設定に取り組んできている。また、地域における高齢化や活性化等々と、さまざまな社会の変化課題への対応も迫られている。

しかし、こうした課題への取り組みは時代と共に変化し、もはや初期的な対応では解決できず、学術的な高さや、高度の専門性が必要とされ、それに対応するためには、大学の持つ力と地域の持つ歴史や伝統・文化等との連携による大きな力から解決は図られるものと考えられるのである。

また、その解決策に活性化や世代間交流といった「若い力」を必要とすることから、大学や

大学生の持つ力を地域へ生かし、課題解決へ近づけ、取り組むものである。また、学生にとっても地域の伝統や文化を学び、地域と深くかかわっていく中から人間としての生き方を深めることが可能となるのである。

したがって、この研究は、日常的なコミュニティー（Community）のレベルにおける「生涯学習」の実践を重ね、その日常的な学習推進の具体的な方法を開発し、学習機会や場の設定など、今日的な行政政策のあり方を探ることをねらいとする。

## Ⅱ 大麻地域の現状と課題～高齢化を中心に

### (1) 高齢化地域の誕生

江別市内において、大麻は最も高齢化の進んだ地域と指摘されている。昭和39年（1964）から42年（1966）にかけて、札幌のベッドタウンとしての開発が進み、宅地分譲が行われ、共同住宅の建設が完成し、「大麻団地」として一躍脚光を浴び、新興住宅地域として成長したのであった。

そして、その当時は30代～40代の働き盛りの人々が、入居した新しい町として活気にあふれていた。しかし、それから時は既に約40年が経過し、当時の入居者はそのまま生活を続けており、その子供世代は就職や結婚で大麻を離れて帰る人が少なく、年が経過すると共に、次第に「高齢者」が多くなり、現在に至ったのである。

### (2) 高齢化と世代間の交流

こうして起きた高齢社会の現状をどう理解し、どう考慮していくかは緊急な課題として対応していかなければならない。

若者が減少し、地域が高齢化してくると、地域全体の活力が鈍ってくる傾向にある。それで、地域に若者との交流の機会や場を作り、相互との交流の活発化を図って行くことが地域の活性化に結びつくはずである。

そして、その中から、若者は高齢者から地域について学び知らされ、いろいろな知恵や伝統的な文化が伝えられて行くことであろう。また、高齢者も、若者たちからエネルギーを貰い、新しい文化を体験されることもある。そして、若者と子供たちとの交流もまた同じである。

### (3) 余暇活動の充実

週休5日制が社会にすっかり定着し、祭日等を入れると、国民の余暇時間は大変多くなって来ている。しかし、その余暇時間をどのように意義あるものに活用しているかは極めて多様化していると言わざるを得ない。

特に高齢者になると外に出ることは年齢が上がるにつれて減少の傾向にあります。それ

で気軽に語れる高齢者対象の集い等の機会や場を多く持ち、皆の出番を豊かにする地域活動が求められている。

生涯学習時代である今日こそ、変化の激しい今日の社会に対応できるよう、また人々の人生を豊かにするための「学習」を継続することが求められている。そのことから、余暇の有効活動は非常に大切な課題となります。

#### (4) コミュニティーの強化

江別市もコミュニティー（Community）づくりについては、行政においても古くから取組を進めている。例えば町内会活動にしても、諸団体活動等においても地域の活動は進められているが、しかし、社会的な変化が大きく、住民が町内活動が「無くてはならないもの」という意識が次第に弱まって来ているように思われる。近隣の日常生活においても地域によっては親密度が薄いところも出て来てしまっている。

また、職場と家庭の往復で終わってしまったサラリーマン等は、退職と同時に行き場が無くなってしまって、家庭でゴロゴロ過ごしているという場合もあり、そういう人たちが集まって語るという場も必要である。

### Ⅲ 課題への対応としての取組

これら種々の課題に対応するために、行政として江別市では「高齢者の住みよいまちづくり推進会議」を開催し、平成19年（2007）に、高齢者の居場所として地域のほぼ中心に、シャッターを下した空店舗を活用した「ほっとハウスおおあさ」を開設した。

#### (1) 「カフェご近所」の誕生

そして、その中の活用団体としての「カフェご近所（主宰：佐久間恭子）」が平成18年1月に立ち上げられた。

「子供から高齢者まで大歓迎、特に連れ添いを亡くし、一人になった方や認知症の家族をお持ちの方来ていただきたい…」と主宰者の佐久間さんは地域に呼びかけていた。

- ア. 活動日は、毎週の月曜日・金曜日（午後1時から3時まで）
- イ. 活動内容 近況報告 体験発表 交流交歓 等
- ウ. 地域コンサート 演奏や皆で歌う（含演奏者との交流）
- エ. 一銭五厘の会 戦争体験者と若者の対話
- オ. 保健婦さん 健康相談 介護相談 認知症相談 等
- カ. その他 やさしい体操 こども絵画・工作 絵本読み 等

室内には美しい絵が飾られ、モーツアルト作曲の音楽等が流れる。

集まった人々は自由に歓談する。そこには手作りケーキやレモンティーが運ばれ、話は一段とはずむ。

全てをボランティアの方々がそれらを支える。互いに意見を交し、体験を語りみんなで歌う姿の中に、今日求められているコミュニティの姿が広がる。それが「カフェご近所」なのである。

#### 「カフェご近所」利用者の感想

「楽しく歌い、語りあおう！」～集う素晴らしき我が仲間

～「カフェご近所」で老後の居場所と生きがいを発見（2008. 9）

大麻中町在住 匿名 男（70歳）

##### ・私は大麻に住む独居老人です

今、毎日がとても楽しく、充実した人生を送っています。それは「カフェご近所」で、この地域の多くの老人と、一緒に楽しく語りあえるからです。

##### ・ここへ通うこと2年が過ぎました

もうすっかり皆さんの仲間入りが出来たことや、一緒に語り合えること喜びを、この上なく嬉しく感謝しております。

##### ・妻が心臓病で急逝し、

独りになった瞬間から、食事・洗濯等の日常生活の一切を妻任せで来た私は途方に暮れ、半年間は完全に行き場を失い、呼吸困難になるほど、落ち込んでおりました。

##### ・新聞記事で「カフェご近所」を知る

「だれでも気軽に参加できる…」という案内記事の文章に励まされて、訪ねましたそして、そこに集う皆さんに、とても暖かく迎えて戴きました。

##### ・それ以来、私に「行くところ」出来ました。

いつでも誰かが待ててくれる

すぐ仲間にとして話し合いの輪の中に入れてくれました。温かいコーヒーも戴けます。自分の家の茶の間に居ると同じような、満ち足りた幸せな気持ちになります。

##### ・行き場がなく辛かったあのころ

朝から晩まで家に居て、テレビとゴロ寝で時間を潰し、誰とも合わず、誰とも話をしない日が続いた。特に妻亡き後は、独居老人の悲哀のどん底を嫌というほど味わわれていた。

##### ・「カフェご近所」で集う

お互いの近況を語り合い、今日的な社会的諸問題について議論し、歩んだ人生を振りかえり、また残りの人生への「夢」を語っている……そこには独居老人の持つ淋しさや暗さは微塵も感じられません。

##### ・世代交流を図りコミュニティづくりを育む

年齢や世代の異なる人々が集まったの交流交歓が自然に行われていることも「カフェご近所」の最大の魅力でもあります。苦しかった戦争体験を語り継ぎ、今の平和の幸せを確かめ合う、時として若者たちと音楽を通して歌う喜びを共有するなど、今日の社会の中で最も大切なコミュニティー活動であり、最も必要な施設が「カフェご近所」だと思う……。

## (2) 「カフェご近所」の「地域コンサート」その意義

「カフェご近所」での活動で、最も充実しているものに「地域コンサート」が上げられる。それは、月に一度、ゲスト奏者を招く、あるいは会員自らが中心となって演奏を進めて行く、コンサートを実施してきている。

### <地域コンサートの概要>

日 時 毎月第3火曜日 13:30～15:30まで

演奏者 市内大学生・一般住民 セミプロ 等

(ボランティアで演奏してくれる人やグループ等)

会 場 「カフェご近所」 大麻東地区センター 等

内容 (音楽) 童謡・唱歌 歌曲 歌謡曲 地域の歌等

プログラムは親しみやすい曲を中心に構成する。

### <世代間の交流>

大学生が演奏し子供や高齢者がそれを鑑賞するという形が多く見られ、それが、世代間の交流に大きく繋がっていると考えられる。特に、演奏後の自由交歓では、大きく話が弾み、いつも時間が足りないくらいである。

それほど、双方が熱心に話し合う光景が続けられているのである。

### <余暇時間の有効活用>

自由時間の活用の視点からも、地域コンサートの意義は大きいのである。このコンサートを通して、豊かな音楽にふれ、おおらかな心となり、また、音楽鑑賞という「文化活動の振興」を、促進しているともいえよう。高齢者にとっては、行き場の一つにもなっており、充実した日常生活のひとコマにもなっているのである。

### <コミュニティーづくりの場>

同じ曲を聴き、同じ歌を歌うことによって、自然と共通意識・共通の心が育ち、それがコミュニティーと発展して、共同意識への強まりとなって、地域でのコミュニティーがいつそう確かなものになるのである。

このように、今日の地域課題にしっかり対応できるところに、このような「地域コンサート」の開かれる意義は大きいのである。

### (3) 地域コンサート開催とその後の経過

地域コンサートは平成17年（2005）7月20日（金）に、その第1回が開催された。

それから毎月1回（第3金曜）に開催され、年間10回ほど開催されていき、これは大麻地区全体のエリアを対象に考え、大麻の近隣で距離的にも近い、北翔大学・札幌学院大学・酪農学園大学の3大学へ、学生に協力を依頼してきた。

そして、大学生を中心に、学生による「地域コンサート」を中心に全体の企画・運営が進められたのであった。

それから6年余が経過した現在、本年9月に第45回を終了したところである。以下その45回目の実践を記録する。

## IV 第45回地域コンサートの記録

「第45回地域コンサート」は小学生向け音楽鑑賞会として金管楽器だけの5人編成によって江別市大麻東小学校で行われた。今回のコンサートは北翔大学芸術メディア学科音楽コースの授業発表の一環として実施され演奏曲目の選曲や進行などすべて学生のアイデアをもとに構成された。

前期アンサンブル授業の中で大きく2点の目標を掲げ演奏会をすることにした。内容については下記のとおりである。

- 1) それぞれの楽器の名前を知ってもらい、音色を聞き楽器を楽しんでもらう。
- 2) 楽器のしくみを知りどうやって音を出しているのかを理解させる。

上記の内容を演奏会に取り入れることを目標に平成23年度のアンサンブル授業が毎週行われ練習だけでなく学生間で多くの話し合いがもたれることになった。

まず、小学生がターゲットとなるため今、どんな曲が好まれているかをリサーチすることになった。また教育的観点から昔から知られている曲やクラシカルなもの、金管楽器の特徴をアピールできることも選曲には必要ではないか！という意見も出る中でプログラムが構成されていった。

2点目である楽器について知ってもらおうという観点では個々の楽器の名前と音色を披露することで印象づけることにした。トランペット、ホルン、トロンボーン、チューバとだんだん低い音が出る楽器へ移ることと楽器のサイズが変化することを学生各自で説明することになった。また金管楽器がどうやって音をつくるか、共通に説明できることで唇を振動させ、それをマウスピースを使い楽器へ伝えることで音になるというシステムを上手に説明することを考えていった。

また、音を変えるためにピストンやスライドという視覚的に見てわかる部分に関しては音とともに興味を引く演出を考えた。トロンボーンのようにスライドで音を変える楽器はグリッサンド奏法を用いておもしろ、おかしく演奏するなど工夫することが可能と思われた。

BRASS QUINTET  
DRAGON QUEST

Tutti

出版社：DOREMI MUSIC

BRASS QUINTET

出版社：ズーラシアンプラス

BRASS QUINTET

Allegro

出版社：ズーラシアンプラス

このような学生からのアイデアをもとに、構成されたプログラムが下記にのとおりであります。

1. ゲーム音楽「ドラゴンクエスト」より序曲のマーチ

すぎやまこういち：作曲

2. ドレミの歌

R. ロジャース：作曲

3. 上を向いて歩こう

中村八大：作曲

4. アニメ「ワンピースメドレー」

田中公平：作曲



平成23年9月21日 大麻東小学校音楽鑑賞会





岡崎美千代さんと共に「ふるさと」を合唱

小学生向けとあってアニメソングを2曲取り入れたが「ドレミの歌」や「上を向いて歩こう」は、昔から人気があり誰もが知っているという点からプログラムされた。演奏会は解説を入れながら行われ約45分程だったが大きな反響を呼ぶものとなり演奏者である学生たちも心に残る思い出深いものになった。以下、コンサートの様子を写真と楽譜共に提供したい。

大麻東小学校では児童、先生、父兄を含めて200名余が金管楽器の音色を楽しみました。特にアニメソングが演奏されたときのこどもたちの反応は演奏者からも感じ取る事ができ観客と奏者が一体になる感覚を体感したように思う。ドレミの歌では何も指示することなく演奏開始と同時に大合唱になり演奏側も驚きと一緒に演奏できる楽しさを味わった。楽器の説明ではそれぞれの音色や独特な技術を披露するたびにこどもたちの目の輝きが増すことを確認し、より演奏への理解が深まったと思われる。多くの児童が初めて見る楽器とのことだったが楽器の名前は知られており音楽への興味、関心があることをうれしく思った。また演奏を聞く態度がしっかりしておりマナー面でも特筆することができる。

北海道を中心に活躍のシンガーソングライターの岡崎美千代さんが後半のプログラムで出演、私たちと一緒に「ふるさと」大合唱しすべての人と音楽を通じ交流している一体感を味わえるコンサートとして幕を閉じた。

最後に、このコンサートに参加された児童・会場校の先生・地域の方々の感想を何篇か取り

上げたい。

- ・小学生高学年  
とても大きな音で迫力があつた。ドラゴンクエストが楽しかった。
- ・小学生中学年  
楽器の説明がおもしろかった。トランペットが格好いい!!
- ・小学生中学年  
アニメソングが格好いい!!もっと聞きたかった。
- ・教員  
とてもすばらしい内容だった。楽器の解説もあり充実していた。もっとこどもたちと一緒に聞いていたかった。
- ・教員  
全員で合唱できた喜びは忘れがたい!!
- ・保護者  
楽しい演奏でギターとの演奏も良く、合唱での一体感が良い。

## V おわりに

はじめは、こどもたちも何か、緊張したような表情があつたが曲が進むにつれて次第に身を乗り出して聴くようになり、最後に歌った「ふるさと」では、会場が一つになり感動深い中にこのコンサートはフィナーレとなった。

そこにはレコードやテープなどの人工的な音楽では味わえない「生の音楽」にふれた感動があり、それを聴いた子供たちも地域の大人の人も、共感し、深い感銘を共有したのであつた。その姿こそが本当の音楽の力によるものであり、そこに大学と地域が連携して進めたコンサートであつたから、このような成果が現れたのである。

演奏した学生たちは、地域の人たちに向かって、日頃研究している成果を発表する場を提供いただいたのであり、「発表」という大きな成果を修めていた。

また地域の人たちは学生の演奏を聴き、楽しんだひと時を送り、心豊かな生活へと発展したことであろうから、ここにも連携の意義が認められるのである。